

The shadow men 陰の男たち

The Economist April 26th 2003 (P27)

United States

2000年、20人ばかりの緊密なグループがブッシュ政権に居場所を得て、サダム・フセインを放逐して民主主義のアメリカ的価値観を中東に広めることを望んだ。ひと呼んで「ネオコン」。それから2年、彼らに関心を払うものはいなかった。

いまや暴君が去り、世界中の政府が恐々と彼らの次の目標がなんだろうと訝っている。バグダッドの火が消えぬうちに、ネオコンの総帥たるポール・ウォルフォビッツ国防副長官は、「シリアにも変化を」と口走った。ウォルフォビッツ自身はすぐに「変化」とは「体制転換」を意味するものではないと付け加えたが、この発言はほんの2週間でブッシュ政権からバース党もどき政権への強烈な外交圧力となった。

この手の言葉が世界中の指導者を騒がせている。権力にあるものは、懸念をなるべく如才なく語ろうと務める。しかし前英国務相であるジョプリン卿は3月18日の議会において、「ペンタゴンの元締めとなっているネオコンたちは、大統領自身に対して有無を言わせぬように見える」と発言した。

ブラッセル在住のネオコン、ロバート・ケーガンは語る。「英国のご立派な方々が、ネオコン（ユダヤと振り仮名をふる）が米国の外交政策をハイジャックしているなどという陰謀論を口にする。パリでは皆が石油と帝国主義（そしてユダヤ）になる」。フランスの議員によれば、ドビルパン外相は「米国政権のタカ派はシャロン首相の手の内にある」と語ったという。散見されるこの手の発言は、政権の中枢にいるネオコン（そのほとんどがユダヤ人である）の行き過ぎたイスラエル支持に向けられている。

それでは、この秘密結社は世界最強の国の外交政策を乗っ取っているのか。小さなイデオログ集団が他国の内政に干渉し、帝国を形成し、国際法を踏みにじり、怪しからぬ結果を招くために並外れた力を振るっているのだろうか。

かならずしもそうではない。米国外交政策を篡奪した知的集団を語ることは、彼らを過大評価することであり、過小評価でもある。米国外交政策は、狭い見方を他人に強要する小さな思想集団に囚われているわけではない。むしろネオコンは大統領によって裏打ちされた広範な運動の一部であり、多少の違いはあっても、チェイニー副大統領以下の主要メンバーほとんどが関与している。（パウエル国務長官がきわだった例外となっている）。ネオコンの潮流は民主党員の間にも見ることができ、だからこそ新しい外交政策が誕生しつつあると考えることに意味があるのだ。

同様な理由により、ネオコン批判は他の勢力の役割を見落としている。米国が世界を再生させるために積極的に力を使うべきだという考え方はコンセンサスに近い。そしてネオコン的課題が、現実的な決定権者である大統領が受け入れているということを考えれば、（ネオコンたち自身は政治的に抜け目がないわけだが）、彼らがすべてやりたいようにやっているわけではない。大統領が耳を傾けている限りにおいて彼らは強力なのであって、自分たち自身の力ではない。米国の外交政策は、ネオコン的なアイデアと大統領の本能（あるいは権力の現実）が混在した結果なのである。

今日に至った過程

なぜこうなったかを振り返るために、まずはネオコンとは誰であるかから始めよう。彼らが派閥であると見られていることは理解できるし、事実、彼らは派閥であった。このグループは1960年代に民主党の分派として発足した。第一世代の彼らは、当時のリベラル本流への批判者として台頭した。イデオログとしての彼らの評判を思うと逆説的なことに、当時の彼らの主たる不満は、民主党員が政策の現実的結果に関心を失っているということにあった。「ネオ」（新）という用語には、左派からの揶揄が込められていたが、「真の」コンサバティブとの違いを際立たせるものであった。設立者の1人であるアービン・クリストルは、「ネオコンとは現実に揉まれたリベラルである」とふざけたものだ。初期ネオコンにとって外交政策はその一部に過ぎず、社会政策こそが重要な関心事であった。

ネオコンの第2世代は違う。民主党員や元民主党員は少ない。いささかも弁解の必要もない共和党員である。彼らは内政に対しても特色ある見解を有してはいる（たとえばトレント・ロット前上院院内総務が人種差別発言で辞任を余儀なくされたときに、もっとも厳しい批判者であったのはネオコンだった）ものの、外交こそが関心事である。ひとつには彼らの社会政策での提案である福祉改革やアフターマティブ・アクションの撤廃が、本流の意見になっているせいもある。

ネオコン第2世代は知的で社会的な派閥を形成しているが、政治的な派閥ではない。ほとんどが似たような生い立ちを持ち、国防総省のウォルフォビッツやスティーブ・カムボーンのような大学教授か、ペンタゴンのナンバースリーであるダグ・フェースやチェイニーの首席補佐官であるスクーター・リビー、国務省のジョン・ボルトンのような弁護士あがりのどちらかである。彼らは同様なシンクタンクに在籍したことがあり、たとえばネオコンのもっとも絢爛たるスポークスマンであるリチャード・パールがフェローを務めるA E Iがその典型だ。彼らが寄稿したり愛読する雑誌は『ウィークリー・スタンダード』であり、その編集長はネオコン創設者の息子であるビル・クリストルである。彼らは同じ研究に参加していることもあり、2000年に発表されたブッシュ政権の報告書で、非常に影響力を有する『米国防衛力の再建』の著者27人中5人を占めている。要するに、彼らはワシントンの論客であり知識人なのだ。

外交政策が官僚によって策定される普通の国においては、大学教授や弁護士の小集団が政策決定の役割を担うとか、果ては独占的な立場になるなどということは考えられないことだろう。起業家的な政策決定の伝統を持ち、ポリティカル・アポインティーの伝統がある米国においては、そう奇妙なことではない。

むしろ尋常ならざることは、ジョージ・ブッシュの周囲に集まっているテキサス生まれのビジネスマンたちの風土と、ネオコンたちがかけ離れていることだ。大統領がトップに据えたチェイニーやラムズフェルド（いずれも元CEO）でさえ、彼らとは違う。多くのネオコンが、選挙戦の際にはブッシュの共和党内のライバルだったジョン・マケインを支持し、アル・ゴアを支持した者までいた。

それゆえ当初のネオコンは、外交政策への影響力を競ったいくつかのグループの一つに過ぎず、それもうまくいかなかったことは不思議ではない。ブッシュは「地味だが強力」な政策を語り、「国造り」のようなことへは批判的で、まさに反ネオコン的だった。初期の大統領の外交政策を担ったのはコンドリーザ・ライス安全保障担当補佐官だった。ライスの主な関心事は他の大国との関係を改善することで、ネオコン的な政治課題はほとんど入っていなかった。

やがてネオコンのもっとも強力な後ろ盾になるチェイニーでさえ、当初は違っていた節がある。ブッシュ父大統領の時代の国防長官として、チェイニーは1991年にサダムを追わない決定を支持した。（ウォルフォビッツは失望した）。そしてイスラエルとその植民政策に対して批判的だったことが記録されているが、これもほとんどがイスラエル寄りのネオコンにとっては唾棄すべきことただだろう。2001年9月11日の悲劇の後も、ウォルフォビッツが大統領に対し、テロリストの攻撃は米国がフセインの脅威に取り組むべきことを示していると進言したときも、チェイニーはそれを黙殺した。

知性対カオス

それではネオコンはいかにして今日の影響力を獲得したのか。9月11日以降により重きをなすようになった歯切れのいい思考によってである。そして彼らの思考は、以前にも増して多くの保守派が賛同するようになった。

ネオコンの言説は、米国が「単極世界」（この言葉は、ネオコンの評論家であるチャールズ・クラウスハマーによって創案された）を経営しなければならないという点に始まる。彼らは世界を善と悪に分ける。米国は、カオスの力を打ち破るために軍事力を使うことに積極的であるべきと考える。中東の民主化を支持することは疑いの余地がない。もっとも、政権の内部ではかならずしも統一見解とはなっていないが。（これは極端に急進的な政策であり、その意味でここで言うネオコンは、「ネオ」でないばかりか「コンサバティブ」でさえない）。それはさておいても、彼らの見方は政権の他の人々とそれほどかけ離れているわけではない。

ネオコンはエネルギーであり、外交に道徳的な明晰さを求め、小さな得点を積み重ねるような姿勢には反対する。米国の力や効率性を制限する多国籍機構に対して懐疑的である。古い同盟よりは、新しい脅威や機会に着目することを好む。

ここでも、これらの見方はネオコンに特有なものではない。こうした傾向は冷戦後の米国の政策に顕著であった。CFRのウォルター・ラッセル・ミードが指摘するように、共和党内の意見はそれ以前から変化している。欧州中心の東海岸から、アジアやラテンアメリカ、中東に関心の強いサンベルトに保守派の中心が移動することは、1970年代のバリー・ゴールドウォーターやロナルド・レーガンの頃に始まっている。

これらの共通の知的な根っこが、ネオコンが伝統的保守政治家であるラムズフェルドやチェイニーと緊密な関係を持つことを可能にした。両人ともネオコンとは見なされないが、ラムズフェルドは1998年にクリントン大統領宛ての手紙にサインをし、サダム・フセインを除去して彼の体制を「米国外交政策の目標」とせよと迫っている。またネオコン政策の土台となる文書は、1992年にチェイニーが国防長官であったときに策定した防衛計画大綱だった。ウォルフオビッツとリビーが起草したこの文書の中で、予防的攻撃の議論が喚起され、米国が誰からも挑戦されないくらいまで軍事予算を増やすべきだと論じられている。10年後、いずれのアイデアも2002年の国家安全保障戦略において公式化されている。

似た者同士の考え方をひとつにした事件は、2001年9月11日のテロ攻撃だった。「一夜にして世界は変わった」とブッシュは言った。ネオコンは長らく中東と、核兵器のような兵器がテロリストの手に渡るという「抑止不能な」脅威に心を奪われて来た。伝統的な共和党の国際主義者たちは、どちらに対しても多くを語らず、知的な代替案をほとんど提出できなかった。そうなると古い政治の法則にあるように、「ないよりはマシ」なのである。かくしてブッシュは、ネオコン的課題の多くを大切にするようになった。

すぐにそうなったわけではない。力でサダムを除去するという決定は、2001年9月11日と2002年3月の間のどこかで行われたようである。2002年1月には大統領一般教書演説において、ブッシュはかの有名な「悪の枢軸」を口にした。この言葉もネオコンの辞書から生まれ出たものかもしれない。そしてこの2月には、ブッシュはA E Iにおいてイラクにおける民主主義建設と、中東における政治改革を支援することに関する演説を行った。

どこまで非難できるか？

ネオコンの影響力は、ブッシュが外交の何たるかを理解できないからだと考えている欧州人もいるようだ。米国の政策における最近の発展は、こうした劣等生扱いの証明にはならない。新しい政策は、地殻変動のような事件への対応として設定された。議会を含めたあらゆる政府のレベルの支持が得られている。(国務省と軍隊の制服組という例外はある)。何より新しい政策は大統領自身によって定義されている。ネオコン派閥はブッシュに依存しており、それ以外の何ものでもない。

とは言うものの、単なる秘密結社の懸念がコンセンサスに転換しただけではないか、と問う人もいるかもしれない。政策を規定するのが誰であろうとも、それは（ある部分の）欧州や、国際法や、多国間機構や、伝統的な同盟の利益にとって有害ではないか、と批判者は言う。それ以上に、政策がある一握りの人たち、ネオコンがその主軸となるものであるにせよ、によって動かされているのなら、彼らの安定性という問題が生じよう。ネオコンとそれ以外の間で、内的な緊張がはらむのではないかと。

米国の外交政策に関する懸念は、ほとんどが手段とコストに関するものであって、目的自体に関するものではない。ネオコンはイラクを解放し、中東に民主主義を拡大し、核不拡散対策を改善したい。批判者たちはこれらの点にはほとんど反対しない。

欧州人は往々にして、米国の政策について気に入らないことは何でもこの秘密結社のせいにしてしまう。だがそれは明らかな間違いだ。米国が国際協定から手を切りたがることは、ネオコンの台頭以前から始まっていたことだ。米国の利益に相容れない多国籍機構に対しては、ネオコンが普通の人以上の嫌悪を持つことは確かにその通りである。それでも「込み入った同盟」に対する彼らの態度は、十把ひとからげの反対というよりは現実的である。皆がとはいわずとも、多くはNATOを好んでいる。なんとなれば共産主義崩壊後の欧州において、東と西を結び付ける役目があるからだ。イラク戦争が始まる前、トルコがNATOに防衛危機の供給を要求した際に、フランスとドイツがこれを止めたとき、ブッシュ政権はNATOの枠外で行動するよりは、障害を回避する方向で道を選んだ。ネオコンの主な憤怒は国連と、そしてときにEUに向けられている。

明らかにここに至る年月には、外交をめぐる大きな騒動があり、なかでも安保理における対イラク第2決議があった。しかしネオコンを非難することはほとんど、あるいはまったく当たらない。フランスとロシアにほとんどの責任があるし、米国外交を担っていた部門はまったくネオコン的ではなかった。

ネオコンの影響力が、他国の利益にとって有害であることが明らかである分野がイスラエルである。ネオコンはアリエル・シャロンの確固たる防衛者である。中東和平への「ロードマップ」がイスラエルの安全保障を危機にさらすのではないかと恐れ、それを止めるためには何でもしようとする。

他方、ロード・マップはそれ自身が彼らの影響力の限界を示唆している。もしネオコンの思惑通り物事が進んでいるのなら、そんなマップは存在しなかっただろう。このことはブッシュに対して、他の力も働いていることを示している。それは国務省であり、安全保障会議であり、トニー・ブレアでもある。

影響力の限界

イラクはネオコンのテストケースである。軍事的勝利は彼らの影響力を著しく増大させた。元に戻すには深刻な反発が必要だろう。さらに戦後の再建を成功させることができ

ば、ますます大統領に彼らの政策課題を受け入れてもらうことができるだろう。このことはダマスカスに軍隊を送ることを意味しない。(ネオコンは思った通りのことを書く。彼らはいつもイラクだけに言及して来たとし、他国に対しては軍事行動を語っていない)。むしろシリアに対してヒズボラ支援を止めさせ、サウジに対してワッハーブ派原理主義の輸出を止めさせ、イランの聖なる体制での内部の反対を支援する意味があるのだろう。

しかし、このお願いリストを通すには障害もある。ネオコンはイラクを改革するのに10年以上待たされている。彼らはイラクに関心を失わないだろう。アフガニスタンとは話が違っているのである。それでも、北朝鮮危機や印パ対立で迷いが出ることはあるかもしれない。もしも経済が落ち込めば、議会で予算をつけてもらえないこともあるだろう。あるいは軍隊をどれだけ長く駐留させるかをめぐって、保守本流の中から包囲網が生まれるかもしれない。保守本流には、軍隊内部の慎重なリアリストが背後についており、なるべく早く兵力を帰国させるよう要求するだろう。

最後にブッシュその人がいる。ブッシュの最大の関心事は再選されることであり、父の轍を避けるために、すでに注意を経済に振り向け始めている。このことはネオコンの影響力を削ぐ以上の効果があるかもしれない。

欧州や他国の政府は、その気になればさらにネオコンに対抗する勢力に力添えすることができる。しかし英国以外は、ネオコンを秘密結社として悪魔視するばかりで、それをしていない。これは間違いだ。ネオコンはか弱いグループではない。彼らは米国の外交政策に知的な枠組みを与えている。彼らを悪魔視することは、単に批判者たちの力を限定的に貶めることにつながるだけだ。

####